



ホームページ <http://www.cpi-mate.gr.jp> URL English <http://cpimate.com>

日本を訪問してくれた、あの里子たちは、立派に成長し、
C.P.I.の教育里親さんたちに、手紙を寄稿してくれました。

＜卒業生レポート（1） P2～P3＞

Dr.Inoka Dilrukshi Munasinghe Mabharana.

C.P.I.会員の皆さんは、この表紙の本を手になれたことがあると思います。今回の寄稿をしてくれたイノカさんは、この本の表紙を飾ったとき、高校生でした。

家は極貧でしたが、才能に溢れていた彼女の今回の手記とあわせて、改めて、この本をお読み戴けたらと思う次第です。

いまでも、新しく入会された方に配布しているこの本は、C.P.I.の教育里親制度の始まりと、スリランカでの仕事が内戦の最中にどのように広がっていったかを知って戴く、言わば、バイブルのようなものです。



＜卒業生レポート（1） P4～P5＞

H.A.I.Nimesh Chathuranga

2017年に、東京・築地本願寺でのC.P.I.会員に呼びかけた『スリランカ伝統舞踊のタベ』に参加された皆様は、来日した出演者たちを励まして踊っていた男の子を覚えておられるでしょうか？

そのときに語っていた夢を一步ずつ実現させる彼の姿を、読み取って戴ければと思います。



＜卒業生レポート（3） P6～P12＞

ランブクピティヤ ディヌーシャ

1995年にSNECCの「日本祭り」で日本語弁論大会で優勝し、日本旅行のご褒美をいただき、私だけでなく家族まで言葉にできないくらいの喜びを与えてくれました。2008年信州大学の研修生、2012年から九州大学の博士課程に進学。2015年に博士号を獲得しました。

家族ぐるみの7年にもおよぶ留学生生活は大変でしたが、CPIのみなさんからの「元気ですか？」の言葉で救われました。2017年から久留米大学外国語教育研究所日本語部門で講師を務めています。



卒業生レポート（１）

Dr.Inoka Dilrukshi Munasinghe Mabharana.

貧しい子どもたちの才能に光をあて続けてください。お願いします。

私の呼び名は、イノカと申します。私は、スリランカの National tuberculosis reference laboratory（結核治療研究所）で医師を勤めています。

父は、私が一歳になる前に他界し、母は、私が15歳になるまで外国で働いていました。私は祖父の家で叔父・伯母と暮らしていました。

HATTON 市のキリスト教系の St. Gabriel convent で勉強していた、私の成績が、学校で一番だったためか、私が8年生のとき、スリランカ日本教育文化センター(SNECC)の HATTON 市のセンター長 Mahagama Wimala お坊さんが、私を奨学生に選んで下さいました。Mahagama Wimala お坊さんは私が4歳のとき読み書きを教えて下さった方です。スリランカでは、小さな子どもたちは、お寺で読み書きを教わるのです。

学校から要求される費用・補習クラス費の一年分を、すべてカバーして下さい、その上、学業を終えるまで面倒を見て下さる、夢のようなプレゼントでした。



C.P.I.の教育里親さんの熊谷さんにご家族には、いくら感謝しても、しきれません。

私が10年生だったとき、SNECC のリーダーシップトレーニングに参加し、最終試験に合格しました。そのあと、能力採点テストがあり、グループで一番になりました。いくつかのグループの優秀学生だけを集めて、日本への10日間の交流旅行が贈られることになり、そこに選ばれました。

この旅行は、夢のような経験と、多くの親切な日本の方々との出会いがあり、生涯忘れないものでした。



私が高等課程に上がる試験を受けたとき、すべての科目につき特別な配慮をもらいました。それというのも、私の住んでいた地域は片田舎で教育環境が著しく低かったのに、私の成績が、その後何年もの間にわたり類をみない試験結果だったことから、とのことでした。

私の地域 HATTON の高校には、科学科目に必要な器財が無く、仕方ないので私は、HATTON からは5時間も離れた KYANDY 市の、最もレベルの高い、Mahamaya girls college という高校に、転校できました。女子学校なので、日本の里親さんが来て下さっても簡単に会わせてもらえない厳しさのある学校でした。そこでも成績一番を通したおかげで、高等課程修了試験の結果、Peradeniya medical facility という、医者になるコースのある大学にはいりました。

SNECC の特別基金からは、様々な教材・必要な器具類を戴きました。そして、大学を出た後、お医者さんと結婚しました。

スリランカでは、医者の資格をとった者は、はじめは地方の総合病院に勤めます。私の場合、Nawalapitiya の総合病院に、インターン（研修医）として一年間勤めました。そこに勤務している間に、長男を授かりました。

インターンを終えて、医者としての最初の勤務地は、KALMUNAII, コロンボから大分離れた処で内戦地域でした。私はそこで、集中医療室の勤務医として働きました。KALMUNAII では、母と息子と一緒にでした。母は、私が高校を転校して以来、ずっと私と一緒に暮らしていました。夫はといえば、KURNEGALA 病院で働いていたので、私たちは一ヶ月に2回しか会うことができませんでした。いつも10時間くらいかけて、私が訪問していました。その頃はまだ、LTTE と政府軍との内戦の最中だったので、旅行は簡単ではありませんでした。

内戦地域での仕事のあと、私は特別にRAGAMA 病院への転勤をすることができました。そこは、大学の医療関係者用の教育機関を兼ねていました。8年間いましたが、とにかく仕事はきつく、忙しかったです。でも、その病院で、二人目の息子を授かりました。其処で、子どもたちの教育と、夫の実家に近いことを考えて、我が家をKADAWAHA に建てました。

最近、私たち夫婦は、結核治療を行うスリランカ唯一の研究所にある、いまの職場に移りました。調査を行い、研究所に必要なものを整え、訓練プログラムを実施し、スリランカの結核患者が効率よく完治でいる手助けを行っています。

母は、いまでも、私たちと一緒に暮らし、夫は毎日仕事をしています。なぜなら、夫は、研究所の仕事とは別に、子どもたちの世話をし、家事をしてくれているからです。

私は医者としての仕事に没頭し、母が日常は、主婦の仕事をしているのです。

日本の教育里親さん、C.P.I.会長の小西様、SNECC のチャンダシリお坊様、HATTON のウィマーラお坊様には、いつも感謝しております。どうか、皆様が、多くの子どもたちに光を与え続けて下さいますようお願いいたします。

C.P.I.のすべての皆様に、仏様の功德がありますよう、お祈り申し上げます。



卒業生レポート（2）

H.A.I.Nimesh Chathuranga

私の気持ちを伝えられる機会を下さった C.P.I.の皆様にお礼を申し上げます。

こんにちは。ニメッシュです。家族の紹介をします。

私の家族は四人です。母と父と弟と私です。父は鉄道のチケットカウンターで働いていましたが、今は年金で生活暮らしです。母はずっと専業主婦です。弟は、小学校4年生です。

はじめに、奨学金を戴いたときの話をします。経済的に困難な状況の中、学校に通っていたのを知っていた学校の先生は、スリランカ日本教育文化センター（SNECC）の奨学金を戴くことのできる学生の名簿に私の名前も入れてくださいました。

9年生のときに、日本の教育里親さんを紹介されて、奨学生となりました。それまでは、必要になったときにだけ、ノート一冊やボールペン一本など少しずつ買ってもらっていた私は、奨学生になってからは毎年、一年分のノート、ペン、鉛筆、学生鞆、制服、靴など学校に必要なものを全て戴けることができ、嬉しくてたまりませんでした。14歳の私には持てないほどたくさんの教材を手にとって帰る道々、頑張って勉強していつか立派な人間になろうと思いました。

9年生から高等課程修了試験が終わるまで、6年間、C.P.I.奨学金をいただきました。

毎年一回、勉強のための文房具を、毎月、補習クラスに行くための奨学金を戴きました。

その助けは勉強のために大変力になりました。センターで毎週土曜日に開かれていた必修科目のための塾に通いました。そして毎週日曜日は日本語のクラスがありました。私もそのクラスに参加して、一生懸命に勉強を頑張りました。このような素晴らしい支援を受けることができたのも、C.P.I.の教育里親さんの川上さんと、スリランカ日本教育文化センターの事務局長である Meegahathenne Chandasiri 師のおかげです。そのご恩はいつまでも忘れないでしょう。

ところで、私は小さいときから舞踊がとても好きでした。SNECC では、コロンボ大学の Visual

Performing Arts 学部の教授である Sriyani Rajapaksha 先生からダンスを習いました。ペラヘラ祭りなどいろいろなセレモニーで踊りを披露していました。高等課程修了試験でも、受験科目のひとつとして伝統舞踊を選択しました。様々な困難を乗り越え、皆様のお陰で、その試験に合格することができた後、センターのダンススクールで後輩に踊りや太鼓を教えながら踊りの先生のサポートをしました。伝統舞踊の中でもキャンディアンダンスと太鼓が得意です。



ここで、私の将来に向けた話をします。

私は、毎年、日本で行われるスリランカフェスティバルで、スリランカの伝統的なダンスを発表する機会に2回も参加しました。それは、SNECCの舞踊団が、日本のスリランカ大使にも認められて、毎年出演できているためです。渡航費は、SNECC に置いてある、C.P.I.と関係の深い USUI-LANKA 文化奨励基金から戴くことができます。

はじめて日本へ行ったのは、普通課程修了試験が終わった後、16歳のときでした。私が日本へ行くことを、C.P.I.の会長様が教育里親さんに伝えて下さいました。日本のお母さんである川上さんは、私に会うために、住んでいる壱岐の島から東京まで、来て下さいました。

遠い日本から、ずっと私を応援してくれていた日本のお母さんの優しい笑顔を見て、とても嬉しかったです。日本のお母さんに直接私の感謝の気持ちを伝えることができ、とても光栄に思っています。あの楽しい時間を今でもはっきりと覚えています。本当に川上さんに心から感謝しています。そのときには東京のディズニーランドや日本の綺麗なところに連れて行ってくれました。スリランカの私の家にも遊びに来てくれると約束しました。その約束通り、日本へ行った一年後、私のうちに遊びに来られて、両親や弟にもたくさんのお土産を持ってきてくれました。家族は本当に喜びました。彼女も私たちの笑顔を見て、とても喜んでくれたようです。

このように、大切な日本人のお母さんに会うことができたのも、C.P.I.の奨学制度のおかげです。ほかの国の奨学制度は、直接に教育里親さんに会うことはできないことを、大人になってから知って、C.P.I.のやり方が「心と心の結びつき」の良さを分かった制度だと思っています。

2017年には再び日本に行くチャンスを得ました。そのときは教師として参加しました。前回と同じように「日本へ行く」と日本のお母さんにお知らせしたところ、はじめてのときと同じように喜んでくれました。日本のお母さん、そして日本の方々と親交を深めることができたことが本当にうれしく思います。後輩の学生たちも、このような有意義な機会を得てほ私は今も Sriyani Rajapaksha 先生と一緒にセンターで踊りや太鼓を教えています。

大学では、振り付けの勉強をしましたから、振付師として一流になりたいと思っています。そして毎年、日本へ行く学生にダンスの練習をさせています。スリランカの文化の一つであるキャンディアンダンスや太鼓の演奏をスリランカの

子どもたちに教え、それによって日本とスリランカの文化交流に協力することができ、とても光栄に思っています。

子どもたちが伝統舞踊を学ぶことで、現在の科学技術の発展が進んで人間関係や優しい心を忘れがちな子ども達の心を穏やかにし、平和な国を築くこととなるよう、これからも、頑張っていきたいと思います。仏様の三宝のご加護が皆様にありますよう、お祈り申し上げます。



1. はじめに

CPI の元里子として、『ストゥーティ 19 号』に記事を執筆できることを大変嬉しく思っております。本執筆では、私が現在まで歩んできた道のりについて簡単に述べ、奨学生であった頃に支援して下さった教育里親の新井様はじめ、現在でも大変お世話になっている方々を含め、全ての C.P.I.の方々に感謝を申しあげたいと思います。

2. 里子になった経緯

私は、1989 年にスリランカの首都、スリー ジャワルダナプラ コーッテに位置しているスリランカ日本教育文化センター（SNECC）から選んでいただき、C.P.I.の教育里子にして戴きました。

当時、中学生だった私は、2000 年に大学を卒業するまで C.P.I.の「日本奨学金」があって、勉強を続けることが、できました。勉強好きでしたが、家庭の経済的な状況はあまり良くなく、度々学校の教育に支障が生じ、困っていたときに、CPI からの奨学金に恵まれたのです。

（写真は、最初の里親さん）

「日本奨学金」に適するかどうかの審査に、

SNECC コッテ本部からチャンダシリお坊さまが我家にいらっしゃったとき、私は、勉強机としていた食器棚の右端にノートを置き、立ったまま



の姿勢で、宿題の作文を書いていたことを、今も鮮明に覚えております。前文には我家と記しましたが、父、母、妹、私を含む4人家族が伯父さんの家の一部屋を借りて住んでいました。

そのような私を、最初に教育里親にして下さったのは、千葉県に住んでいらっしゃる新井秀子様でした。スリランカでの、奨学生認証式の舞台の上で、奨学金としての教育道具を渡して下さったときに、笑顔で輝いた新井さんのお顔が目に刻み込まれ、今も思い出せます。

実は、私が戴いた奨学金のおかげで、私だけではなく、妹まで大変助かりました。両親にとって、姉妹ふたりに教育をさせることは、ほんとうに苦しかったのですから。

私にとっては、「日本奨学金」がどのようなものだったかを一言にまとめますと、「今の私が存在するのは、『日本奨学金』のおかげだ」と、はっきり申しげることができます。

3. 「日本奨学金」からのいただき

「日本奨学金」として、高校を卒業するまでに、教育道具、制服用の布、私服用の布、無料で受けられる塾サービスなどをいただき、大変助かりました。これらの支援がなければ、私は、途中で思い通りの教育を受けられなくなり、途中で教育を断念していた可能性もあったと感じております。

3.1 日曜学校で学んだこと、そこでの活躍

「日本奨学金」をいただいてから、私は、SNECC の日曜学校に参加しました。そこは、宗教と道徳を学ぶ学校でした。現在の私を育ててくれた重要な学校の一つです。私は、日曜学校を代表して色々なコンテストに参加し、全国レベルでも闘いました。また、生徒会などでリーダーとしての力を発揮することができました。

これらの全てから得られた経験を今の人生に生かしていると、日々感じております。

3.2 日本語学習とそこから切り開いた人生

「日本奨学金」の一環として、SNECC では、無料で、1 週間に 1 時間半程度の日本語を学習できる機会がありました。どうしても奨学金を提供してくださる新井さんとコミュニケーションを取り、お礼を申し上げたいという気持ちがあったため、私は、楽しく日本語の学習を続けました。学校の勉強などで忙しくなっても、決して日本語学習を辞めず、欠かさずに日本語教室に通っていました。「どうしても」という動機がないと、「楽しみに」続けることはできません。

そのように日本語を学習していたので、高校生になるタイミングで、語学選択の授業に日本語がある高校に進学し、日本語の勉強をもっと頑張るようにしました。その結果、高校では、他の生徒よりも日本語の成績が良くなりました。

それが大きな励みとなり、大学に入学してからも、英語の副専攻として、専攻科目に日本語を選びました。このように大学でも日本語を選択するようになったのは、「日本奨学金」が日本語という新たな道を開いてくれたからだと思っています。

3.3 幼い頃からの夢の実現

私は、幼い頃から、教師になりたいと強く思っていました。どの年齢になってもその考えには、ぶれがなく、高校生となるにつれ、その夢をより実現可能なものとしてまいりました。高校生の頃は、「日本語の先生」という形で、その夢をより具体化いたしました。

大変嬉しいことに、高校を卒業すると同時に、SNECC で、1 時間半ずつ 2 クラスで、日本語を教えられる機会をいただきました。自分の日本語の知識を後輩の里子さんに提供できることと共に、日本語の教師になりたいと思っていた自分の夢を早く実現できたことに、大喜びとやりがいを感じました。

しかし、入学したスリランカ・サバラガムワ大学は、SNECC からかなり離れたコトマレに近いところにあったため、大学を卒業するまでの間、センターでの日本語の教師を休まざるをえなかったです。大学卒業後に、すぐにセンターでの日本語クラスの教師に戻り、同時に、コロンボのア

ーナンド女子高等学校でも日本語を教えるはじめました。スリランカでは、高校卒業試験とは大学入学試験でもあるため、大学受験者である高校生に日本語を教えるのは、大変な責任を感じる仕事でしたが、日本語教師とは私のあこがれの仕事だったため、よい教師を目指し、必死で頑張っていました。

3.4 初めての日本旅行と複雑な気分

1995 年に、SNECC で「日本祭り」が開催され、私は日本語の弁論大会で最優秀賞を獲得いたしました。他にも日本語の作文、シンハラ語の作文や弁論などの様々なコンテストがあり、私を含め、全てのコンテストで最優秀賞を受賞した学生たちが、C.P.I.の支援で、2 週間の日本旅行の機会を戴きました。

今振り返ってみると、C.P.I.からいただいたこの最高の機会が、私の人生を大きく変えた出来事です。貧しい家庭に育っていた私は、隣国のインドに行くことすら、夢にも思っておりませんでした。そのような中、先進国の日本に行ける機会を戴いたことは、私だけではなく、家族にまで、言葉で説明できないほどの喜びを与えてくれた機会でした。

このように、C.P.I.のおかげで、高校卒業試験が終わって 1 週間後に、私は初めて来日いたしました。私にとっては、飛行機に乗るところから、何もかもが初めての経験で、2 週間の来日期間中も、ずっとワクワク・ウキウキしながら様々な経験や体験をしていました。

日本の発展に驚き、たくさんの里親さんとの出会いに喜び、思い出がいっぱいになった胸で、初めての日本旅行から帰国した後、また、ぜひ日本に行きたいという気持ちと、しかし自分の経済力では一生日本に行けないという気持ちで心も頭も複雑になっていました。

3.5 再びの日本

教師としてアーナンド女子高等学校で頑張っていた私の姿勢を認めたからだと思いますが、国際交流基金から‘Junior and Senior High-School Educator’s Study Tour Program 2001’に招待され、2001 年 7 月に、再び 2

週間のツアーで来日することになりました。様々な国から60名程の教育関係者らが来日されていましたが、その中で、日本語のできる唯一の教育関係者は私だけだったため、帰国前日の送別会では、参加者からの謝礼のスピーチを日本語に訳す機会をいただきました。また、国際交流基金が開催しているプログラムについて詳細に書かれたパンフレットも基金の方からいただき、帰国後に応募するように、アドバイスまでいただきました。

帰国したら、高等学校からスリランカの文部科学省の英語と外国語部門にプロジェクト オフィサーとして転職し、スリランカにおける英語および外国語教育の発展に力を入れはじめました。しかし、文部科学省との契約は一年のみだったため、スリランカにおける外国語教育（日本語教育も含む）に対して、十分な活動ができなかったことは残念に思っておりますが、他方では、1年間でスリランカの小中学校に、英語を媒介語としたイマージョン教育を導入できたので、プロジェクトチームの一員として、今も誇りに思っております。

3.6 国際交流基金で海外教師長期研修を受ける

文部科学省での仕事の契約が切れる頃、2回目の日本ツアー終了日に、国際交流基金の方からいただいたパンフレットに目を通し、国際交流基金の「海外日本語教師長期研修」に応募いたしました。その際には、コーッテセンターで日本語教師をしていたことが大いに役立ちました。無事に審査に合格し、今度は、国際交流基金浦和センターで、6ヶ月間の日本語教師長期研修を受けることになりました。

多くの研修生がインターネットを通して研修についての情報を収集していましたが、インターネットの普及がなかったスリランカにいた私の場合、唯一の情報源だったのは、2回目の日本ツアーのときに、基金の方からいただいたパンフレットでした。そのパンフレットがなければ、私はこの研修について何も知らず、研修を受けていなかったはずです。今は、パンフレットをくれた基金の方に対して感謝の気持ちで胸が一杯です。研修では、日本語そのものだけではなく、外国語としての日本語の教え方まで学べたことが、後ほど

私の人生には大きな収穫となるチャンスでした。

研修後に帰国した私は、まず、結婚いたしました。大変シンプルな結婚式でしたが、CPIの里親さんの二家族が結婚式に来てくださいました。結婚後、私は、出身校、サバラガム大学の日本語講師となり、大学教員の道を歩みはじめました。母校で、指導していただいた先生方に交じって、教師をするのは、多少ながらも複雑な気持ちになっていましたが、いつも大学生が必要とされている日本語教育の在り方を私なりに模索しながら、教科書通りの教育のみではなく、プラスアルファで新たな内容も加えつつ教えるように、日々努力を重ねました。しかし、学生に対する論文の指導では一番困るようになり、自分の日本語の能力および研究についての知識が不十分ではないかと思いはじめました。そこで、日本語・研究の能力をもっと磨ける機会として、修士課程に入学できる機会を必死で探し求めた結果、最初はシンガポール国立大学、次に、日本政府文部科学省のMEXT奨学金に選ばれました。迷いなく、日本語教育をマスターしたいため、日本を選択いたしました。

3.7 研究生からスタートする日本での新生活

2008年4月2日は、私の4回目の来日です。その日、私は、2才の誕生日を迎える娘と夫を連れて、長野県の信州大学松本キャンパス言語文化学科の研究生として来日いたしました。同時に名古屋大学にも選ばれていましたが、これまでと違って、今回は長期間にわたる滞在期間であり、なおかつ家族連れでもあったため、多くの不安を感じており、以前からお世話になっていた一人のCPIの里親さんの近くである信州大学を留学先に選ぶことにしました。

競争の激しい何回もの審査を勝ち抜いた結果、日本政府から奨学金をいただく国費留学生になれましたが、休職について、勤め先から十分な理解を得られず、最終的に、あこがれだった大学講師の職を辞めて来日せざるを得なかったです。スリランカの日本語教育を担ぎたい、所属先の学生に良い日本語教育を提供したいと強く思っていた私にとっては、これが耐えられない悲しさでした。しかし、強い決心で来日できたのは、夫、母

親、そしてスリランカにある日本大使館の方からもらったお言葉があったからでした。「日本で博士号が取ったらその後の将来はきっと明るいものに違いない」と大使館の方からお言葉をいただき、せっかく手に入れた留学のチャンスを逃さない決断をいたしました。

しかし、4 回目の来日後、信大では待ち受けていたのは、母国で、学習者および教授者として私が学習/教授してきた日本語教育は一体何かと思わせるほどの大変な教育でした。また、2 歳児の子育てや孤立感に対して一言も文句を言わない夫への心配などがその大変さを増し、さらに時間が経つと、長男の誕生による子育ての手間、長女の病気および手術、夫の無職状態なども頭を悩ませるようになりました。その中でも、一番耐えられなかったのは、日本文化が十分に分からなかったため、親しくて最も頼られる存在だと信じていた里親さんの間で、起こしてしまったコミュニケーションの摩擦や人間関係における失敗でした。そのため、時には大泣きをする自分も存在していました。

このような中でも、朝から晩まで毎日のように、研究室や図書館にこもり、2 年間も日本語・日本文化を猛勉強し、2010 年 4 月から無事に修士課程に進学し、修士号を獲得しました。引き続き 2012 年 4 月から九州大学比較社会文化学府の博士課程に進学いたしました。博士課程では、スリランカと日本の感謝表現および感謝に値する場面についての研究を行い、その成果を様々な学会で発表し、4 つの論文として学会誌にも投稿するような研究活動を行いました。他には、地域にあるボランティア日本語教室で日本語を教える、小中学校における外国人児童生徒のお手伝いをする、日本の学校のお便りを英語に訳す、スリランカの文化を日本人に紹介するなどのたくさんのボランティア活動も行い、3 年目となる 2015 年 3 月に、九州大学から博士号を獲得いたしました。しかし、修士課程と博士課程に所属していた 5 年間は、母親としても、妻としても失敗していたといつも思っております。

7 年にも及ぶこの留学生生活は大変でしたが、諦めずに頑張れたのは、国費留学生として、日本政府からいただいた MEXT 奨学金があったから

です。そして、いつもそばで支えてくれる夫と幼い子供二人がいたからです。さらに、悩み事や困り事が起こる度に、優しく手を伸ばしてくれる CPI の里親の方々がいたからです。里親の方々に「元気ですか」と一言のメッセージをいただくと、おかげで私は何倍も救われました。このように多くの方々に支えられて、博士課程を修了するまでの道を歩んで参りました。

4 私にとって、挑戦できる間口広くなりました

教師としてアーナンダ女子高等学校で頑張っていた私の姿勢を認めて下さったと思いますが、国際交流基金から” Junior and Senior High-School Educator’ s Study Tour Program 2001” に招待され、2001 年 7 月に、再び 2 週間のツアーで来日することになりました。様々な国から 60 名程の教育関係者らが来日されていましたが、その中で、日本語のできる唯一の教育関係者は私だけだったため、帰国前日の送別会では、参加者からの謝礼のスピーチを日本語に訳す機会をいただきました。また、国際交流基金が開催しているプログラムについて詳細に書かれたパンフレットも基金の方からいただき、帰国後に応募するように、アドバイスまでいただきました。

帰国したら、高等学校からスリランカの文部科学省の英語と外国語部門のプロジェクト担当者として転職し、スリランカにおける英語および外国語教育の発展に力を入れはじめました。ただ、文部科学省との契約は一年だったため、スリランカにおける外国語教育（日本語教育も含む）に対して、十分な活動ができなかったことは少し残念でした。

しかし、その 1 年の間に、スリランカの小中学校に、英語を媒介語としたイマージョン教育を導入できたことは、プロジェクトチームの一員として、今も誇りに思っております。なにしろ、ここから、私の間口が広がったのですから。

4.1 日本語の専門家として、チャンスが巡ってきました

文部科学省での仕事の契約が切れる頃、2 回目の日本ツアー終了日に、国際交流基金の方から戴いたパンフレットに目を通し、国際交流基金の

「海外日本語教師長期研修」に応募いたしました。その際には、SNECC で日本語教師をしていたことが大いに役立ちました。

無事に審査に合格し、国際交流基金浦和センターで、6ヶ月間の日本語教師長期研修を受けることになりました。

多くの研修生がインターネットを通して研修についての情報を収集していましたが、インターネットの普及がなかったスリランカにいた私の場合、唯一の情報源だったのは、2回目の日本ツアーのときに、国際交流基金の方からいただいたパンフレットだけでした。そのパンフレットがなければ、私はこの研修について何も知らず、研修を受けていなかったはずです。今は、パンフレットをくれた方への感謝の気持ちで胸が一杯です。研修では、日本語そのものだけではなく、外国語としての日本語の教え方まで学べたことが、後ほどの私の人生には大きな収穫となるチャンスでした。

研修後に帰国した私は、結婚いたしました。大変シンプルな結婚式でしたが、C.P.I.のメンバーでスリランカを訪れておられた皆さんが、結婚式に来てくださいました。

結婚後、私は、出身校であるサバラガム大学の日本語講師となり、大学教員の道を歩みはじめました。母校で、指導して下さった先生方に交じって教師をするのは、恐れ多いような気持ちにもなりましたが、大学生が必要としている日本語教育の在り方を私なりに模索しながら、教科書プラスアルファで新たな内容も加えつつ教えるよう、日々努力を重ねました。

しかし、学生に対する論文の指導には、自分の日本語の能力および知識が不十分ではないかと思うようになりました。

そこで、日本語・研究の能力をもっと磨ける機会として、修士課程に入学できる機会を探し求めた結果、最初はシンガポール国立大学、次に、日本政府文部科学省の MEXT 奨学金に選ばれました。迷いなく、日本語教育をマスターしたいため、日本を選択いたしました。

4.2 研究生からスタートする日本での新生活

2008年4月2日は、私の4回目の来日です。その日、私は、2才の誕生日を迎える娘と夫を連れて、長野県の信州大学松本キャンパス言語文化学科の研究生として来日いたしました。同時に名古屋大学にも選ばれていましたが、これまでと違って、今回は長期間にわたる滞在期間であり、なおかつ家族連れでもあったため、多くの不安を感じており、以前からお世話になっていた方が長野県にいたので、信州大学を留学先を選ぶことにしました。

競争の激しい何回もの審査を勝ち抜いた結果、日本政府から奨学金をいただく国費留学生になりましたが、休職について、勤め先から十分な理解を得られず、最終的に、大学講師の職を辞めて来日せざるを得なかったです。スリランカの日本語教育を担いたい、所属先の大学の学生に良い日本語教育を提供したいと強く思っていた私にとっては、大変残念でした。しかし、強い決心で来日できたのは、夫、母親、そしてスリランカにある日本大使館の方からもらったお言葉があったからでした。

「日本で博士号が取ったらその後の将来はきっと明るいものに違いない」と大使館の方からお言葉をいただき、せっかく手に入れた留学のチャンス逃さない決断をいたしました。

信大では待ち受けていたのは、「母国で学習者および教授者として私が学習/教授してきた日本語教育は一体何だったのか」と思わせるほどの大変な教育でした。

また、2歳児の子育てや孤立感に対して一言も文句を言わない夫への心配などがその大変さを増し、さらに時間が経つと、長男の誕生による子育ての手間、長女の病気および手術、夫の無職状態なども頭を悩ませるようになりました。

中でも、悩みの種だったのは、親しくて最も頼られる存在だと信じていた前述の方との間で、コミュニケーションの食い違いが生じたことでした。どの社会でも、人間関係は難しいと感じました。

2年間、朝から晩まで、毎日のように、研究室や図書館にこもり、日本語・日本文化を猛勉強し、2010年4月から無事に修士課程に進学し、修士

号を獲得しました。そして、引き続き 2012 年 4 月から九州大学比較社会文化学府の博士課程に進学いたしました。博士課程では、スリランカと日本の感謝表現および感謝に値する場面についての研究を行い、その成果を様々な学会で発表し、4つの論文として学会誌にも投稿するような研究活動を行いました。

他には、小中学校や、地域にあるボランティア日本語教室で、外国人児童生徒に日本語を教える、日本の学校のお便りを英語に訳す、スリランカの文化を日本人に紹介するなど、沢山のボランティア活動も行い、3年目となる 2015 年 3 月に、九州大学から博士号を獲得いたしました。しかし、修士課程と博士課程に所属していた 5 年間は、忙しさのあまり、母親として妻として、失敗していたと感じています。

7 年にも及ぶ留学生生活は大変でしたが、諦めずに頑張れたのは、国費留学生として、日本政府からいただいた MEXT 奨学金があったからです。そして、いつもそばで支えてくれる夫と幼い子供二人がいたからです。さらに、悩み事や困り事が起こる度に、優しく手を伸ばしてくれる C.P.I. の皆さんがおられたからです。

「元気ですか」と一言のメッセージをいただくと、そのおかげで私は何倍も救われました。

5. 日本での就職

博士課程修了後、指導教官から、九州大学の特別研究者になるように誘われ、6ヶ月間、九州大学で研究活動が続けましたが、2015 年 10 月から九州大学比較社会文化研究院の留学生サポートスタッフとなり、英語を媒介語としている留学生をサポートする仕事を始めました。元留学生だったため、留学生の気持ちを理解し彼らの助けになることがやりがいのある仕事でしたが、指導教官からは、早く教員職に就くようにいつもご助言をいただきました。

大学講師とは、私のあこがれの仕事でもあったため、2016 年 4 月から熊本崇城大学留学生別科の専任教員に就きました。その 崇城大学での 1 年間の勤務を経て、2017 年 4 月から久留米大学外国語教育研究所日本語部門に移り、講師として現職に至っております。

どの職場でも、留学生の日本語教育だけではなく、日本語教育、多文化共生、比較文化などの様々な分野に関わる研究も行い、さらに、大学のアドミニストレーションにもできる限りの協力をしてまいりました。

日本での就職経験はまだまだ浅いので、勉強しなければいけないことがたくさんあり、日々努力を重ねながら、頑張っております。スリランカにいたら、ほとんど母国の日本語教育だけで終わってしまうところでしたが、現職は日本であるため、中国、韓国、ベトナム、ネパール、台湾などの様々な国の留学生の教育に関わり、場合によっては、日本人学生向けの授業も行い、全世界の日本語教育に関わっているような気分を味わっております。

さらに、久留米大学では、個人研究費も出していただき、これまでの 3 年間では、アメリカ・イタリア・イギリスなどの国で研究発表をすると同時に、それらの国も少し見て参りました。これからも私の専門分野である日本語教育、異文化コミュニケーション、多文化共生などにおける研究活動およびボランティア活動を通して、日本とスリランカを含め、全世界で貢献して参りたいとの意欲があります。



6. 教育里子ではないのに教育里子です

私は、1995年に高校を卒業すると共に、CPIの教育里子ではなくなりましたが、その後もSNECCから「日本奨学金」をいただき、大学卒業まで勉強いたしました。里親の方々がスリランカを訪問される度に呼ばれて、日本の方々と教育里子たちとの間の話が上手くいくよう、頑張りました。そのおかげで、多くのC.P.I.の皆さんと知り合いになり、仲良くなり、日本語力も上達いたしました。

そのように知り合った里親の方々が、私が来日する度に会いに来てくれたり、困ったときに助けてくれたり、めでたいことが起きる度に祝ってくれたりしました。今回の日本滞在は、既に12年目を迎えております。現在、主人が、近くに住んでいらっしゃるC.P.I.の会員の方から、無料で土地を貸していただき、家庭用の野菜を育てております。どうしても市立中学校に入りたいという長女は、入寮のときに、東京に住んでいらっしゃる方に支援して戴きました。つまり、私は今も多くのC.P.I.の皆さんに、お世話になっております。これも、私が教育里子だったからだと思います。

6. 全ての里親の方々に感謝

私は、現在の立場にくるまで、時には「大変だなあ」と感じる道のりでもありましたが、SNECCとC.P.I.からの「日本奨学金」、その奨学金を経済面でご負担下さった教育里親さん、他にも多くの方々のありとあらゆる面からの支えがあったから、歩んで来られたと思っております。日本でも、C.P.I.の多くの方々に、優しく支援・アドバイス・サポートをしていただき、暖かく見守って戴いたお陰で、今の私が存在します。

そのような方々に恵まれて、歩んで来られたこの人生は、とても幸せなものです。私の家族もその幸せを感じているには違いがありません。

CPIの会長・小西さま、SNECCの事務局長・チャンダシリお坊さまはじめ「日本奨学金」制度に関わる全ての方々に、この場を借りて、心から感謝を申し上げます。

7. おわりに

私は、長年、C.P.I.やSNECCだけではなく、日本政府からも支援をいただいてここまで参りました。どのようにすればその恩返しができるかを日々考えております。

その一番目の方法は、大学教師としての今の仕事を精一杯頑張っ、社会に貢献することだと思っております。ただ、この方法では、お世話になった里親の方々に、直接的な恩返しができないことがわかっております。

二番目は、現在付き合っているC.P.I.会員の方々との関係を大事にし、世話する側に立つことだと考えております。

三番目は、現在、住んでいる地域のボランティア活動に協力することです。しかし、仕事と両立してボランティア活動のために、時間を用意するのは非常に大変なことではあります。できる時に、できることを少しずつでも頑張りたいと決めています。

四番目は、自分の子供をしっかり育て、社会を愛する、社会に役立つような子供にしたいということです。ただ、子育てには、正解や前例がないため、これは、私の日々の悩みでもあります。これらのことを通して、少しでもお世話になった方々に、恩返しを示したいと思っております。

どうもありがとうございました。



熊本地震後に再会した家族